

令和2年度 第1階 上京区まちづくり円卓会議（ライフスタイル部会）摘録

日 時： 令和2年8月4日（火） 午後7時から午後9時まで

場 所： 上京区総合庁舎4階 大会議室1・2

出席者： 【学識者】

新川議長，小谷委員

【円卓会議委員】

高橋委員，狭間委員，西田委員，岸本委員，小野委員，寺尾委員，鈴江委員

【区役所】

林区長，三谷室長，高橋課長，石井係長，西川担当，松井まちアド，加藤まちアド

1 議題

（1） コロナ禍による価値観等の変化について

委員 新型コロナウイルス感染症による変化として、テレワークに代表されるIT化が急速に進展していると感じている。その反面、ITリテラシーの高い人と低い人の間で格差が益々広がるのではと懸念している。集まらないからオンラインを活用する人もいれば、集まらないからやらない人も出てくることを懸念している。

一般的に、年配の方は、オンラインに慣れていない方々が多いので、そうした方々イベントは軒並み中止となっていることを残念に思っている。

一方で、若年層メインのイベントは何らかの形で実施されていて、情報格差が一層広がっていく。

情報を届けるチャンネルが多くなったので、どこをセグメントするのかという問題と、必要な方々に確実に届ける必要がある情報がしっかり届いているのか心配である。

委員 「ライフスタイルを継承・発展させるまち」の表現に違和感がある。コロナ後は、元のライフスタイルには戻らないのではないかと考えている。

私たちは、休んでいる間に、「何がしたいのか」、「どう幸せにありたいのか」といった問題に向き合った。これからは、本当に何がしたいのか自分に向き合っていく生活スタイルになると思う。

コロナ禍で仕事が増えている方々を見ていると、例えば和装では、人に見せるための購入ではなく、自分が好きな時に好きなものを着るために発注するという方が増えている。従来とは異なり、活動の単位が、一人一人の幸せを実現している単位のような、もう少し小さな単位になっていくと思っている。好きなもの同士がつながる社会、そういうライフスタイルがこれからの現実になる。

委員 新型コロナウイルス感染症の拡大により地域行事が中止になる中で、町内の方々はもちろん、そういう組織に入っていないけど、そういう所に繋がっていく可能性のあった大学生や外国人の方と地域とをつなぐ接点が減少している。人と人との交流やつながりをどう維持していくのが課題だと考えている。

ICTの活用等による「新しい生活スタイル」については、今後増えていくと思うが、検討ワードとして、オンラインという言葉も新たに加わってもいいのではないかなと思うが、逆にオンラインがあれば、オフラインもあるので、オンラインとオフラインのバランスもテーマになると思う。

委員 この間、年齢や地域での分断が起こっていると感じている。

コロナの危険性の度合いを語っても違いがわかる。目に見えている分断もあるが、元々、脆弱性のあった人が更に追い込まれて見えにくくなっている状況を感じる。

今までは、人間関係があって、語らなくても共有できていたものが、語りにくく見えにくくされている分断を感じている。

自分は自分でスタンス持ちながら、違う人の意見も否定せずにいられることを続けていくことが難しいと感じている。

委員 仕事の関係で見ると、飲食店ではスマホ等によるモバイル注文が増加しているが、高齢者等でスマホを使えない人たちは注文できない状況が生じている。便利だけど、誰もが利用できるという観点からは難点があると感じている。

また、新型コロナウイルス感染症を気にして生活する機会が多くなり、地域の行事が減少しているが、地域で子どもたちに何かできることはないかと考えている。

委員 今回は、ウイルスという病気が相手なので仕方がないと思っている。ライフスタイルについては、基本的に個人が考えて決める事だと思っている。

今回の経験も踏まえて、スマホをはじめとするICTの必要性も理解できるようになった。外に出歩くことができない状況下では、ICTの活用は、意思疎通の便利な道具になると思う。

高齢者向けのスマホ教室は是非やってほしい。高齢者も勉強してスマホを使いこなせるようにしないといけない時代だと感じている。

委員 新型コロナウイルス感染症により、例えば、大学のサークルや部活といった大きな所に所属することがリスクであると考えられる社会になった。仕事の関係上、どこにも所属していない個人単位で活動する事例が増えてきたように感じる。

(2) **資料3** 方針1について、加筆・修正が必要な項目等について

委員 新型コロナウイルス感染症の拡大が収束しないままでは、地域単位で動く機会がない状態が続く。

地域の中でももう少し小さな単位、例えば園芸好きなグループといったような小さな集まり同士を横でつなぐことが必要ではないか。コロナ禍での地域力はなかなか難しいのではないかと。

委員 取組1に記載されている「外部との多様なつながり」のところで、外部とか地域の規模感はどういうくらいの規模なのかなと思っている。

また、取組3の取組例「地域で営まれている年中行事の記録や発信」についてだが「地域で営まれている」というフレーズは良いと思う。

年中行事だけに限らず、日常を切り取っても良いのではないかと考えている。新型コロナウイルス感染症禍にあっても変わりなく続いている日常に焦点を当てる取組は良いと思う。

委員 地域行事等をどのような方法で、どのような規模で実施していくのか。

大学の新生は、大学に来ることができないので、まだ一度も同級生に会ったことがないといった孤独状態の中にいる。「出会えない」、「出会う場が少ない」中で、どうやって出会うかが課題。

方針1の取組2にある取組例「地域行事等の広報活動等の充実」については、地域行事に限らず、地域でやってる小さな単位の取組「こんなこともやってるよ。」といった発信も必要だと思う。

委員 方針1の取組2にある取組例「ICTを活用した地域組織の運営」についてだが、オンラインの強みは物理的な距離を取り払うものだと思うが、地域という近い単位でICTを使う意味が分からない。防災防犯の意味からも、物理的な距離が近いコミュニティも重要だと思うのでそのバランスのとり方が重要だと思う。

なにぶん、ジェネレーションの部分、コミュニケーション手段が世代によって違い過ぎる。10代や20代にとって、LINEは既に過去のものになっている感じがする。

また、若い人はコミュニティを選んで所属しているので、興味のあるところ好きなところにしかない。自分の居場所を選べる状態になっている。

これでは、地域の諸先輩方と分かり合うことができないのではないかと。バランスのとり方がむず

かしい。オンラインに傾くと高齢者は参加できないし、その反対に傾くと若い人は古いと感じるし、地域コミュニティの維持の仕方が難しい課題であると思う。

委員 新型コロナウイルス感染症による自粛期間の中で、人との交流や地域活動を求める人が減少していると実感している。

改めて、地域活動の広報は大事であると感じており、広報に協力し合うことで情報を届けていきたいと考えている。

委員 地域活動については、新型コロナウイルス感染症の影響で休憩している状況だが、心配はしていない。地域でのつながりは、それほど弱いものではない。

インターネット等を介したやりとりで、人間と人間のつながりを本当に強めることができるのか疑問を持っている。

方針1の取組3にある取組例「上京ならではの暮らし方の発信」についてだが、上京区民からすると「上京ならではの暮らし」とは何だろうかと感じてしまう。上京区以外に住んだことがないので、他がどういう暮らしをしているのかわからない。

委員 新型コロナウイルス感染症の影響により、地域行事はほとんどなくなった。また、友達同士の交流も少なくなっており、今は耐える時期だと思っている。

リーディングプロジェクトにある「高齢者のスマホ活用事業」については、高齢者の中にはスマホを持っていない人もいる。スマホを持っていない人のことも考える視点が必要だと思う。

(3) **方針2** 及び **方針3** について、加筆・修正が必要な項目等について

委員 方針2の取組1にある取組例「和装文化」に関する記載についてだが、今は難しいが、夏祭り等の機会を利用して実際に着てもらい、和装に触れる機会があると良い。

また、方針3の「自然を守るまちづくり」についてだが、エンゼルハウスが無くなるので、跡地に緑のある公園ができるといいなと思っている。エコバックについても、持たないと買い物に行けない時代になったのは良いことだと思う。

委員 方針2の文化に関する記載についてだが、区民目線ではよくわからない。

「上京ならではの文化」については、恐らく、能なら金剛能楽堂や河村能舞台といったことを言いたいのだと思うが。

取組2の表題「文化庁と連携した文化を基軸としたまちづくり」についてだが、国の機関が来ても、国と地元の文化がどのように連携できるのかわからない。

取組例にある「新たな文化芸術の担い手が集うまちづくり」のような取組は出来たら良い。

リーディングプロジェクトの「お茶会」については賛同する。毎年やっても良いのではないかな。

委員 方針2の表題が「文化と伝統を大切にすまちづくりの推進」とあるが、外向けの発信が多く、この時点で非日常感がある。

文化伝統は日常ではないかと思う。こう書かれると、今生きている文化伝統ではなく、過去の遺物になっているという理解をしてしまう。本来、文化の継承は、親から子、子から孫だと思うが、生活環境の変化により難しくなっている。形だけ残すのは簡単だが、そこにある思いや精神は、果たして上京に住んでいる人に届くのかと思う。

方針3についてだが、新型コロナウイルス感染症の影響が大きく出ているところだと思う。テイクアウトの情報がSNSに多く掲載されているが、テイクアウトを実施することで、食品ロスやプラゴミが逆に増えているのではないかな。仕方なくやっている部分があると思うので難しいが、昔の宅配寿司のように、食器を持っていったらデポジットでお金を返すシステムがあったらいいと思う。そういうことに行政側からアプローチできたら良いと思う。

委員 方針2のリード文についてだが、若者だけが伝統文化に触れる機会が少ないわけではない。上京

区民を対象に、上京ならではの伝統文化を再発見してもらうまちづくりの推進の意味合いがあっても良いのではないかと思います。

方針3とも関わるが、エコバックを持ち歩く環境整備が整ってきた。上京には西陣があるので、西陣の風呂敷等の利用を推奨し、身近に触れる機会等を増やすことで、文化や伝統と日常を連動させる取組があっても良いのではないかと。

学生にとっては、西陣織や京菓子といったテーマは人気があり、上京ならではの取組だと思う。先程、非日常との話が合ったが、非日常から入っても日常になる、記憶に残るものになったらいいと思っている。

委員 方針2には「文化と伝統」の記載があるが、この際、伝統の文言は消してもいいのではないかと。上京の新しい文化や伝統を創る機会だと思う。

例えば、能の世界では、健康能楽といった自分の体を整える取組をされている方もいる。見せるもの、きらびやかなものはなくなっていくと思っている。同じものを5年後、10年後に期待するのは違うと思う。自分の中身に向き合っていくように変化するのではないかと。

「お茶会」を御苑でやるなら、御苑の森を大事にする、もっと緑を増やす、広い空間を畑にするといったことを考えたほうが良いと思う。文化は、もっと自分の中身に向き合う方向にシフトしていったくないかと思っている。

委員 方針2の取組についてだが、「誰のためにやるのか。」といった視点が必要である。

先程の発言でもあったが、コロナの今だからこそ、体や心や生活を整えていくために上京の文化を活用するのは良いと思う。

方針3の取組についてだが、ゴミが増えることは避けないといけない。自分とか目の前の人を守るために使い捨てを使っているが、目先の自分を守るために地球が汚れていくのは悲しい気持ちになる。食べ残しをこれだけ減らすといった目標があってもいい。やることもう少し見えたらいいい。

委員 例えば、リーディングプロジェクトにある「お茶会」だが、一同に集まるお茶会ではなく、同じ時間に小さいグループがあちこちでお茶会をするスタイルはどうか。「ここはこういうテーマでお茶会をやっています。」といったものが良い。

大きなお茶会を開催することが素敵な文化ではない。やらないということではなく、もう少し新しい多様な「お茶会」を開催してはどうか。

委員 出発点としては、人とのつながりをどのように結んだら良いかという点、つながりを皆が求めている点があることが認識されたのがスタート地点だったと思う。つながりの入口は、従来の町内会・自治会、あるいはもう少しコアな好きなものや価値観で結びつく人もいる。価値を置くものの多様化や違いといった切り口に合わせて結びつきを求めていくことが大事だと思う。

地域力の維持や推進についてだが、地域の大きい名前が付いているものではなく、個々の趣味等に基づくつながりがあってもいい。特にそれが伝統文化によるものであれば、方針2だし、環境にもう少し注力するなら方針3という観点で分かれても良い。健康や趣味で分かれてもいい。

計画案の資料を見ていると、対外発信が強すぎる面があるので、もう少し内に向く発信でも良いのではと感じている。人とのつながりというスタート地点を意識し、伝える先を意識しながら組み直していけばいい。

環境については、新型コロナウイルス感染症の影響により、みんなで集まって何かに取り組むのは難しいが、環境は知識の共有から始めないといけない部分もあるので、自分の生活を変えたら、環境はどう変わるのかの気づきを大切にする必要がある。

コロナ禍で方法を変えないといけない。新しい方法として「ICTの活用」については、スマホの活用も考えないといけないが、それは、従来のアナログな方法を捨てるのではなく、今まで通りにはいかないが、リアルな付き合い方でどうすれば安全を確保できるか、オンラインであっても、

一定の共有性といったつながりを感じるやり方を模索することが大事である。

人とのつながりの結びつけ方や価値の多様化、価値観の集合体をどのように地域全体の力に変えていけるのが大事である。

議長 議論を聞いていて、気になる点をお伝えしたい。

1つ目に、ライフスタイルや日々の暮らしを考えることは、将来の暮らし方を考えることにつながる。ある程度先を見据えて理想の状態をどう実現していくかという視点と、目の前でこういうことがあってということ。それをどのように計画の中で生かしていくのがこの計画づくりである。

2つ目に、多面的なところとして、日常と非日常を日々の暮らしの中で使い分けている。

そういう重なりをどのように暮らしのリズムの中に取り入れていくか。それを将来の暮らしやすさのリズムにしていくかが問われている。

3つ目に、新しい問題が生まれている。それ自体の良し悪しではなく、私たちがこういう問題をどう受け止めて、どう対処しようとしているのか、コロナと共に生きるとは別にウイルスと共存しようというのではなく、ウイルスに対抗して、乗り越えつつ、どうやってやりくりしていくか。このやりくりの仕方自体をわたしたちの生き方にしないといけなないとすると、それに最適な生き方をどのように探していくのが求められている。

いくつか具体的な点を申し上げると、具体的な1点目は、ICTの活用については「孤立」と「繋ぎ直し」という側面があった。

具体的な2点目は、地域力の低下が言われる中で、コロナによってバラバラになりそうな地域をつなぐ力が一人一人の中にあるような気がする。それをどこまで大切に見守ることができるか。それがどういう風に改めて紡がれていくか、これからの上京のまちづくりで生かしていく必要がある。

具体的な3点目は、若者の位置付けを考える必要があるということ。外と内の若者をどう地域でより良く生きていただくのか、もう一方ではそんな人たちと一緒にどう生きていくのかといった工夫はいくらでもできそうだと可能性を感じた。ここはしっかり計画に入れたい。

具体的な4点目は、5年後、10年後を考えると、むしろ元気な高齢者が社会の中心になる。そのあたりを見通しながら、年齢や世代を問わず、共に学んで成長できると良いと感じた。

具体的な5点目として、伝統文化については、あるものは否定できないということ。どのように捉え直し、未来に向けてどう育むのか、新しいものにするのかを考えることが大事であり、もう一方では、続けるべきかどうかといった議論もある。

歴史や文化、芸能もそうだが、今生きている人と今から先に生きていく人が、それをどういう風に見て、感じ、後世に伝えるか。同時に、私たちがその担い手でもあることを自覚する必要がある。

具体的な6点目は、エコのまちづくりについてだが、単にゴミやプラというものではなく、暮らしのスタイルや日常の生活価値をどう考えるのが大事である。

エコな暮らしは、経済的にも豊かな暮らしで、日々の生活環境も快適、人間関係もスムーズといったように、より良い生き方をするためのエコな暮らし方が、価値を持っていく。そういったエコなまちや人をどう創るかが課題である。

緑や伝統的な建造物は、ある意味ではエコな暮らし方を実践してきた蓄積であり、現在もその蓄積を大きくしようとしている人がたくさんいる。そういう所に改めて目を向けていくと、上京の環境づくりに大きく貢献すると思う。地球環境問題もあるが、同時に、それぞれの地域がどう変わるか、そこに暮らす一人一人が行動を変えていくかが、地球そのものを変えていくことにつながる。

上京から地域のエコな暮らしをより快適にしていくことで、それが地域の繁栄につながり、地球環境も改善することにつながると良いと感じている。

以上